芥川龍之介「死後」試論

——夢中の〈僕〉をめぐる

Xianghua JIN (金香花 : Ph.D Student, Osaka University Graduate School of Letters)

✉ kingkoka825@yahoo.co.jp

(日本) 大阪大学大学院文学研究科日本文学専修修士後期課程。日本近代文学、芥川龍之介作品研究。「芥川龍之介『たね子の憂鬱』論—揺れ動く不安心理の行方」(神戸:『阪神近代文学研究 第21号』阪神近代文学会, 2020)、「芥川龍之介『彼 第二』論—(僕)の夢を軸として」(横浜:『芥川龍之介研究 第13号』国際芥川龍之介会, 2019)、「芥川龍之介『妙な話』論—夫婦間におけるテレビシー現象に着眼しながら」(神戸:『阪神近代文学研究 第19号』阪神近代文学会, 2018)、『多言語翻訳 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』』(大阪: 大阪大学大学院文学研究科 日本文学多言語プロジェクト、中国語訳を担当, 2015)

A Study of Akutagawa Ryunosuke's "Shigo"

: Focused on 'my' Afterlife in the World of the Dream

Akutagawa Ryunosuke's "Shigo" depicts 'my' afterlife as a return to the real world through a dream to meet 'my' remarried wife and friend S. Typically, "Shigo" has been read as an illustration of Freud's theory that a dream is the fulfillment of desires and a passage to the unconscious. Therefore, in relation to this novel the focus has been on 'my' dream, not on 'me'. However, as you can guess from the title of the work "Shigo", which means "After Death", the author's main focus is not only the dream world, but also 'my' existence after death. It seems that the world of the afterlife has not yet been sufficiently considered in relation to the novel. For example, there is the question of why 'my' wife and friend S treat 'me' in the usual way, even while they recognize that 'I' have died. Ultimately, the question of why the dream is used to depict the afterlife has not yet been clarified. Therefore, in this paper, I will attempt a new reading of this work by re-examining the details of the dream world and the posthumous world of 'me', which have not been fully discussed in previous analysis.

Keywords Afterlife(死後の生), Dream(夢), Psychological research(心霊研究), Materialization phenomenon(物質化現象), Colored dream(色彩夢)

1 はじめに

芥川龍之介は死後の存続を信じていなかった。それは、作者の未定稿「遺書」(1916年頃)から見受けられる。

当時 己の頭脳を支配してゐた考は 己の死後に関する不安である 死後と云つても死後の己の生命がどうなるかと云ふやうな問題ではない 己がスウェーデンボルグやマアテルリンクに最遠い人間である事は 君もよく知つてゐるだらう¹

(傍点引用者)

「己がスウェーデンボルグやマアテルリンクに最遠い人間である」とあるように、芥川は心霊主義に傾斜し〈靈魂不滅説〉を唱えたスウェーデンボルグや、メーテルリンクとは異なる靈魂観を持つことが窺える。また、死後存続説への不信を仄めかすこの一文は、生前芥川がスウェーデンボルグや、メーテルリンクの著作を実際に読んでいたことを裏付ける。

ところが、芥川は自殺する二年ほど前に、〈死後生存〉をモチーフにした、小説「死後」(『改造』1925年9月)を発表する。「死後」は、〈僕〉が夢を通じて自分の死後の生を見るという構図になっている。

「或旧友へ送る手記」(1927年7月)において、芥川が「僕はこの二年ばかりの間は死ぬことばかり考へつづけた」²と吐露していたことから、彼が死を考え始めた時期は、ちょうど小説「死後」を執筆した頃ではないかと推測される。このような観点から、「死後」は芥川最晩年の死生観を考察する上で意義深い作品であると言える。しかし、小説「死後」は、未だに十分な考察がなされていないのだ。そこで、本稿では芥川の「死後」の読解を深めると共に、作者晩年の死生観や靈魂観の一端を垣間見することを目的とした。

「死後」については、芥川自身の言説も残されている。小穴隆一宛の遺言の中で、芥川は「一、若し集を出すことあらば 原稿は小生所持のものによられたし。二、又「妖婆」(「アグニの神」に改铸したれば)「死後」(妻の為に)の二篇は除かれたし」³と書き記す。〈妻の為に〉という理由から、「死後」は芥川生前の単行本には収録されなかった。

「死後」をめぐる同時代評を見ると、斎藤茂吉は芥川宛の書簡(1925年8月28日)の中で「かゝる不意識状を描写してフロイド一派の浅薄に墮せず実に心ゆくばかりと存じ候」⁴と評価するほか、広津和郎も、芥川が「死後」の末尾でフロイドの名に触れることについ

¹ 『芥川龍之介全集』第二十二巻(東京：岩波書店,1997.10),p.59.

² 『芥川龍之介全集』第十六巻(東京：岩波書店,1997.2),p.4.

³ 小穴隆一「二つの絵」(関口安義編『芥川龍之介研究資料集成』第7巻,東京：日本図書センター,1993.9),p.153.

⁴ 吉田昌志「死後」項(菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介事典(増訂版)』東京：明治書院,2001),p.225.

て「何時もの彼の手だが、併し愛嬌があった。随筆風ではあったが、悪い感じはしない」⁵と好意的な見解を示す。が、当時広津と同じ座談会(「新潮合評28」、1925年10月)に出席した宇野浩二は「死後」について、「やっつけ仕事の感じがある」と不評を下す。なお、神崎清は「黄色評論」の中で「筆を転じて跡は白河の夜船、見事論理の進行をとどめぬ」⁶と「死後」を好意的に捉える。具体的に、「これ作者邪魔くさいがためならんか。否、書ける筆を持ちながら強ひて書かうとはなさらぬ御方なり。十のもの九つまでは肚にたたんで一つしか噪らぬ芸當なり」⁷と述べる。神崎のこの論評を受け、芥川は「尊台の「黄色評論」中拙作「死後」の高評あり。あの結末は尊台の鼻屑眼に御らん下され候如く故意に筆を弄したるものには無之、単にメ切りに間に合わせんと急ぎたる為に御座候」⁸(1925年9月29日)と釈明する。

先述したように、小説「死後」は、芥川最晩年の死生観や靈魂観を検討する上で非常に重要な作品であるにも関わらず、従来議論の俎上に余り載せられなかった。「死後」の読解をめぐる研究論文を見ても、一柳廣孝氏の「消された「フロイド」―「死後」をめぐる疑念」以外には見当たらない。一柳氏は「死後」にある〈フロイド〉の名に注目しており、それが全集編集者によって消された理由について「私小説・心境/小説における夢が、作者の欲望を現前させる装置として読者に認知されたとき、「フロイド」という名前はその事実性を保証する、強固な理論の提示と受け取られる」⁹からだと言明する。また、乾英治郎氏は「死後」を〈夢〉と〈死〉とが主題となっている作品であるとし、そこには「「識域下の我」が〈夢〉の中で顕在化する」¹⁰という芥川の晩年作品に多用されている夢の手法が用いられたと論じる。さらに、吉田昌志氏は、「芥川の関心が、この「死後」において夢の中という形をとりながらも自分の死に向かいはじめ、以後次第に死への傾斜を深めてゆく」¹¹と述べる。

このように、先行論では主にフロイトの夢理論を手掛かりにし、「死後」の読解を試みたことがわかる。従来研究の焦点は、〈僕〉の夢に絞られ、夢内容が〈僕〉の心の奥に潜んでいる潜在意識として捉われてきた。しかし、「死後」にはフロイトの夢理論以外に、色彩夢が〈心身の不調を表す〉¹²という当時の夢学の知識も応用されている。また、「死後」という作品名から窺えるように、作者の主眼は〈夢世界〉のみならず、〈死後の世

5 「新潮合評会」の「9月の創作」(『新潮』10月号,1925.10)。

6 神崎清「黄色評論」(『文藝時代』第2巻第10号,1925.10)。

7 前掲 神崎清「黄色評論」(『文藝時代』第2巻第10号,1925.10)。

8 芥川龍之介「神崎清宛書簡」(『芥川龍之介全集』第二十巻(東京：岩波書店,1997.8), p.184)。

9 一柳廣孝「消された「フロイド」―「死後」をめぐる疑念」(『無意識という物語』名古屋：名古屋大学出版,2014.5), p.124)。

10 乾英治郎「「死後」の〈評価と展望〉」(関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』東京：勉誠出版,2000.6), p.219)。

11 吉田昌志「死後」(菊地弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介事典(増訂版)』東京：明治書院,2001.7), p.226)。

12 高峰博著『夢学』(東京：有文堂書店,1917.6), p.211。本書には「病的状態と色彩夢とは関係を有することあり」と記載されている。

界」にも置かれている。が、〈死後〉という異次元については、従来言及がなされていない。

確かに「死後」には、一家の戸主としての〈僕〉のエゴイズムが、無意識への通路となる夢を介して顕現化しているが、本作の独創性は、むしろ夢という大きな枠組みの中の〈死後〉という異世界にあるのではないかと考える。即ち、作中において〈僕〉自身は勿論、友人Sや妻も〈僕〉の死を認知しながら、いつもと変わらない姿で〈僕〉に接する所に、作者の創意が感じられる。

本稿では、先行研究で余り考察がなされていない「死後」の異空間、〈死後の世界〉に光を当ながら、小説「死後」の読解を深めたい。特に、作者が〈死後の生〉を〈夢〉を媒介として描いたことを、一九二〇年代の日本に広く流布された近代心霊主義の影響などを視野に入れながら検討したい。本研究は、芥川における心霊学や、夢学の影響状況を把握することにも繋がると考えられる。

2 死後の生をめぐって

芥川の晩年の小説「死後」には、〈僕〉の死後の生が夢を介して描き出される。夢の中で〈僕〉は三十四歳で亡くなるが、〈僕〉自身は日常世界を超越した空間に置かれているとは思わず、自由に友人Sや妻に会うことができる。不思議なことに、夢の中のSや妻は、〈僕〉が故人となったことを知りながらも、通常通り〈僕〉と会話をする。そして、夢に現れる場所や風景も現実界のそれと余り変わらない。

夢の中の僕は暑苦しい町をSと一しょに歩いてゐた。砂利を敷いた歩道の幅はやつと一間か九尺しかなかつた。それへ又どの家も同じようにカーキイ色の日除けを張り出してゐた。

「君が死ぬとは思わなかった。」

Sは扇を使ひながら、かう僕に話しかけた。一応は気の毒に思つてゐても、その気もちを露骨に表すことは嫌つてゐらしい話ぶりだつた。(略)

僕はちよつとSの顔を眺めた。SはやはりS自身は死なずに僕の死んだことを喜んでゐる、—それをはつきり感じたのだつた。するとSもその瞬間に僕の気もちを感じたと見え、厭な顔をして黙つてしまつた¹³。

(傍線引用者、以下同様)

夢の中で〈僕〉が暑苦しさを感じることから、夢中も蚊帳を吊った現実と同様に夏場であることがわかる。夢世界において、帰らぬ人となった〈僕〉は、普段通りに友人Sと付き合う。そして、友人Sも〈僕〉が故人となったことを知りながら、特に違和感を

¹³ 『芥川龍之介全集』第十二巻(東京：岩波書店、1996.10)、p.299。

覚えることなく、いつも通り〈僕〉と言葉を交わす。このように、夢中の〈僕〉が自らの死を認識しつつ、現実界の人と再会を果たしたことは、〈靈魂の死後存続〉として捉えることができよう。

また、夢において若死にした〈僕〉が、自らの死について「残念に思つてはゐなかつた」、「しかし何かSの手前へ羞かしいやうには感じていた」と語るのは、〈僕〉の死が想定内のことであることを暗示する。換言すれば、〈僕〉は非業の死を遂げたのでなく、自らが命を絶ったという可能性が考えられる。従って、〈僕〉は自分より五つ年上のSより早く世を去ったことを恥ずかしく感じたのだ。

一方、〈僕〉は友人Sが自分は死なずに、〈僕〉が死んだことを喜んでいるのを「はつきり感じた」というが、夢の中で現世を浮遊する〈僕〉の魂が、このように感情を抱いていることには、どのような意味合いが持たれるのだろうか。

この問題をめぐって、明治末から大正にかけて日本の劇壇文壇に大きな影響をもたらした、生前芥川にも大きな影響を与えたとされる¹⁴、ベルギー象徴主義の詩人、劇作家のモーリス・メーテルリンク(1862~1949年)の靈魂觀を参照したい。靈の感じられる感覚について、メーテルリンクは「意識の運命」の中で以下のように捉える。

- ・肉体が消えて了へば、あらゆる肉体の苦痛が同時に消失するであらう事は確かである。なぜなら吾々はそれがもう所有しない肉体の中にあつて苦しんでゐる心靈を想像することは出来ぬ。肉体と同時に吾々が心のもしくは道徳上の苦悩と呼ぶものは一切なくなるであらう。
- ・無視された愛情、粉碎された恋、失望、失敗、絶望、裏切り、屈辱、悲哀また愛する者の失亡はその刺激をたゞ靈によつて活気づけられた肉体を通ることによつて獲得する。(略)靈は幸福でない一切に無感覚である。それはたゞ無限の歓喜のためにのみ造られている¹⁵。

(傍点引用者)

メーテルリンクによると、靈は「幸福以外のすべてのものに無感覚である」¹⁶ものの、それを取り巻く肉体を通じると、不満や失敗、絶望などの諸感覚を獲得することができるという。

メーテルリンクの「意識の運命」論は、彼の全集以外にも、エッセイ『死後は如何』¹⁷(栗原古城訳、一九一六)や、大正期の『心靈問題叢書』第2巻に選定された『生と死』¹⁸(水野葉舟訳、一九二三)にも収録されている。

靈の感じられる感覚の範囲を特定した、メーテルリンクのこの論説は、芥川の「死後」

¹⁴ みなもとごろう「メーテルリンク」(関口安義編『芥川龍之介新辞典』東京：翰林書房、2003)、p.587。

¹⁵ 鷗尾浩訳『メーテルリンク全集』第2巻(東京：冬夏社、1920)、pp.141-142。

¹⁶ モーリス・メーテルリンク著、水野葉舟訳『生と死』心靈問題叢第2巻(東京：新光社、1923)、p.135。

¹⁷ メーテルリンク著、栗原古城訳『死後は如何』(東京：玄黄社、1916)、p.197。

¹⁸ メーテルリンク著、水野葉舟訳『生と死』心靈問題叢第2巻(東京：新光社、1923)、p.134。

において、幽霊となった夢中の〈僕〉の正体を細かく分析することに示唆を与える。マーテルリンクの靈魂觀に照らし合わせて考えると、小説「死後」において、友人Sが早逝した〈僕〉に会って喜びを感じるのを、死後の〈僕〉が「はつきり感じた」という理由がわかるようになる。つまり、友人Sに抱く〈僕〉の感情は、死によって身体から遊離した〈僕〉の魂が、再び「肉体を通ることによつて獲得」¹⁹したものと理解できる。しかも、幽霊となった夢中の〈僕〉は、身体化されて友人の前に立ち現れたのだ。夢世界において、友人Sが〈僕〉の死を認知しながらも、違和感を覚えることなく〈僕〉に接してくれたのも、〈僕〉の霊姿が生前の姿そっくりな格好に物質化、視覚化されたからである。

同様な解釈は、夢中の〈僕〉が妻に会う場面にも通じる。

古いくぐり門や黒塀は少しもふだんに変らなかつた。いや、門の上の葉桜の枝さへきのふ見た時の通りだつた。が、新しい標札には「櫛部寓」と書いてあつた。僕はこの標札を眺めた時、ほんたうに僕の死んだことを感じた。けれども門をはひることは勿論、玄関から奥へはひることも全然不徳義とは感じなかつた。(略)

しかし妻自身も櫛部某に尊敬を持つていないことははつきり僕にわかつてゐた。(略)

「子供に父と言はせられる人か?」

「そんなことを言つたつて、……」

「駄目だ、いくら弁解しても。」

妻は僕の怒鳴るよりも前にもう袂に顔を隠し、ぶるぶる肩を震はせていた。

「何と言ふ莫迦だ！それぢや死んだつて死に切れるものか。」²⁰

夢の中で〈僕〉は、友人Sと別れた後に、あてもなく歩いていたが、いつか自分の家に着く。門やブロック塀などは、生前の時と少しも変わらなかったものの、標札だけが「櫛部寓」に新しく変わったことで、〈僕〉は改めて自分の死を実感するようになる。このような描き方は、夢の中の〈僕〉が自分の死後生存を認める証しにもなろう。

友人Sの場合と同様、夢の中で妻も〈僕〉が死んだことを知りながら、突然姿を現した〈僕〉に何の違和感も覚えることなく、普段のように接してくれる。妻が平然とした理由は、眼前に立ち現れた〈僕〉が、実体としての〈僕〉と変わらなかったからである。さらに、櫛部と再婚した妻を怒鳴りつけることから、死後の〈僕〉には依然として感情が宿っていることが確認できる。このような感覚は、死後、〈僕〉の身体から遊離した魂が、再び「肉体を通ることによつて獲得」²¹したものと理解できよう。

更に、小説「死後」における〈櫛部寓〉という言葉も、夢中の〈僕〉を霊的存在として捉えられる端緒となる。〈櫛部寓〉は、従来〈奇ぶ〉に通じ、「^し霊妙に見える、神秘的な力

¹⁹ 前掲、鷲尾浩訳『マーテルリンク全集』第2巻(東京：冬夏社,1920), pp.141-142.

²⁰ 『芥川龍之介全集』第十二巻(東京：岩波書店,1996.10), pp.301-303.

²¹ 前掲、鷲尾浩訳『マーテルリンク全集』第2巻(東京：冬夏社,1920), pp.141-142.

を持っているの意」²²、又は「霊的な意を帯びる」²³ものとして捉われてきた。この点は、小説「死後」に靈魂の死後存続を主張する心霊主義の知識が用いられていると想定できる、有力な手掛かりとなる。

人間が死後も霊となって人格を維持しつつ存在するという考え方は、古来多くの宗教や民俗学に見られるが、しかしそれを科学的研究の対象として究明しようとしたのが、心霊学である。十九世紀半ばにアメリカで始まった近代の心霊主義は、特定の宗教を離れた一種の世界観として成り立ち²⁴、明治末年以降日本に流入してきた。

霊的要素やスピリチュアルな知識は、特に「死後」の創作時期に近い、一九二〇年代の芥川の多くの作品に用いられている。「魔術」(1920年)や「妙な話」(1921年)、「アグニの神」(1921年)、「近頃の幽霊」(1921年)、「英米の文学上に現はれた怪異」(1922年)、「保吉の手帳から」(1923年)、「河童」(1927年)等を例示することができる。

総じて、「死後」において、〈僕〉が自らの死後の生を夢に見るのは、幻想的な話にほかならない。勿論、夢の中では、人間の「潜められた過去の記憶が非常に充進して」きたり、「過去の単片が、戯曲的な精練を経て見事に、或る統一ある芝居となって」²⁵作り出されたりするなど、覚醒時にはできない神秘体験をすることは可能である。しかし「死後」の場合、作者は幻想的な異空間である夢世界のみを強調したとは思えない。むしろ、夢という大きな枠組みの中の、死後の世界に比重を置いたのではないだろうか。何故ならば、作中には死後の〈僕〉に会う友人Sと、妻の平然とした態度が浮き彫りにされたからで、作品名も「死後」になっているからだ。しかも、彼らは〈僕〉が若死にしたことを十分に把握している。これは夢世界の出来事とは言え、芥川が「死後」の創作に当たって、趣向を凝らしたテーマ設定であると言えよう。

3 死後の〈僕〉と〈靈魂の物質化〉

前章では、夢の中で友人Sと妻が、帰らぬ人となった〈僕〉に違和感を覚えていなかった理由を、死後の〈僕〉が実体を伴う姿で立ち現れたからだと推察する。

「霊の身体の一部、全体が実体となって現れる現象」²⁶を、心霊主義では〈靈魂の物質化〉と見做す。霊の介在により生じる客観的な現象とも言われる、〈靈魂の物質化〉には、死者の霊が生前の姿に実体化した形で現れる²⁷という。

このことから、芥川の「死後」において、夢中の〈僕〉が生き返ったかのように日常に

²² 『芥川龍之介全集』第十二巻(東京：岩波書店、1996.10)、p.377。「死後」の〈注解〉による。

²³ 『芥川龍之介全集』6(東京：筑摩書房、2006.10)、p.45。「死後」の〈注釈〉による。

²⁴ 羽仁礼著『超常現象大事典』の〈心霊主義〉項(東京：成甲書房、2001.4)、p.71。

²⁵ 小熊虎之助著『夢の心理』(東京：江原書店、1918.9)、p.503。

²⁶ 羽仁礼著『超常現象大事典』(東京：成甲書房、2001.4)、p.77。

²⁷ 前掲、羽仁礼著『超常現象大事典』(東京：成甲書房、2001.4)、p.77。

姿を現したのも、〈霊の物質化現象〉として捉えることができよう。というのも、前章で考察したように、死後の〈僕〉には依然として感情が宿り、しかも身体化されて友人Sや妻の前に現れる。特に、「死後」が創作された大正期の『心霊現象研究』²⁸や『心霊学摘要』²⁹によると、心霊の物質化によって霊は人の目に見え、手に触れるなど、五感で感受し得る形を取って現れるという。

近代心霊主義は、死者との交流から始まり、明治末期、西洋から日本に流入する。その影響下で、明治末年から大正期にかけて、日本国内では心霊研究書が相次いで刊行される。特筆すべきことは、一九二〇年代に出版された心霊研究書には、それ以前のものには余り言及されていなかった〈霊の物質化〉、いわば霊体の可視化がクローズアップされていることである。

この現象は、芥川が実際に読んでいたとされる³⁰、柳宗悦の『科学と人生』（靑山書店、1911年）や、「意識の運命」を収録した『マーテルリンク全集 第2巻』（1920~1922年）の「死後の生活」³¹にも記載されている。柳宗悦の『科学と人生』では、死後存続を主張する心霊研究を「新しき科学」として位置付ける。同書は、霊の一部や全体が何らかの媒体を介し、具体的な形として現れる「心霊の物理的現象」を具体的に紹介する³²。また、『マーテルリンク全集 第2巻』においても、新交霊術と言われる心霊学が「新科学」として見做される。マーテルリンクによると、最初に〈物質生成現象〉を研究、発表したのは、イギリスの化学者、物理学者で、心霊現象研究協会の創設メンバーでもある、ウィリアム・クルックスだったという。

話を小説「死後」に戻すと、作中において、死後の〈僕〉が友人や妻と再会を果たしたことを、〈僕〉の霊魂の物質化によるものと想定できる、もう一つの根拠は、〈僕〉の死後の生をめぐる、きめ細かな描写と周到な構成である。特に作中において、〈僕〉の死に関する表現が過剰に反復されていることは、注目に値する。

- ・「君が死ぬとは思はなかつた。」
- ・Sは扇を使ひながら、かう僕に話しかけた。
- ・僕は格別死んだことを残念に思つてはゐなかつた。
- ・SはやはりS自身は死なずに僕の死んだことを喜んでゐる、—それははつきり感じたのだつた。
- ・僕はこの標札を眺めた時、ほんたうに僕の死んだことを感じた。

²⁸ 有馬純清著『心霊現象研究』（東京：警醒社、1924）、p.316.

²⁹ 山口鉞三郎著『心霊学摘要』（静岡：沖天社、1926）、p.123.

³⁰ 奥野久美子「恒藤恭「向陵記」と一高時代の芥川龍之介」（関口安義編『生誕120年芥川龍之介』東京：翰林書房、2012.12）、pp.269-270.

³¹ 鷲尾浩訳『マーテルリンク全集』第2巻（東京：冬夏社、1920）、pp.62-68.

³² 柳宗悦著『科学と人生』（東京：靑山書店、1911）、pp.80-81.

物質化現象の事例として、『科学と人生』の「三 心霊の物理的現象」にはイタリアの精神科医で犯罪生物学の創始者である、チェーザレ・ロンブローゾ（一八三五~一九〇九）が、著名な物理霊媒であったパラディノー夫人の交霊会に立ち合い、亡き母と邂逅したことが挙げられる。

- ・妻はすっかり悄気てしまひ、竹の皮の鎧ばかりいぢつてゐた。
「そりやゐてもかまはないさ。俺はもう死んでゐるんだし、—」
- ・「何と言ふ莫迦だ！それぢや死んだつて死に切れるものか。」³³

夢中の〈僕〉が友人Sや妻に会う場面において、〈僕〉の死は相手との共通認識として話題に上っていることが、本文の引用からわかる。このような描写は、帰らぬ人となった〈僕〉に依然として感情が宿り、しかも友人Sや妻の気持ちを読み取るなど諸感覚を覚えていることを際立たせる。勿論、夢の中で非現実的なことを体験したり、幻想的な光景を見たりすることも考えられるが、「死後」の場合、このような設定には〈僕の死後の生〉という異様な光景を浮き彫りにさせようとする作者の狙いがあったと言える。さもないければ、作中の〈僕〉の死に対する描写は、それほど繰り返されることなく、平板に流れていったはずで、友人Sや妻に〈僕〉の死を改めて認識させる場面も念入りに仕上げられなかったと考える。

本稿の冒頭にも挙げたように、未定稿「遺書」(1916年頃)の中で、芥川は自分が心霊主義に傾斜していた「スウェデンボルグやマアテルリンクに最遠い人間である」と、死後存続説への不信を告白する。しかし、それとは逆に、晩年の小説「死後」(1925年)において、〈僕〉の死後の生を前面に押し出すまでには、どのような経緯があったのだろうか。

繰り返すことになるが、その背景の一つとして考えられるのが、大正期、日本国内の心霊研究で新しく取り上げた〈靈魂の物質化〉の影響であると考えられる。

以下で「死後」が執筆された同時代の主な心霊研究書から、〈物質化現象〉に関する説明を一部抜粋し、取り上げてみる。

- ・心霊の物質化は学説でなくして事実である。真面目な学者達が、心霊現象研究中に目撃する事実である。そこで此事実即ち霊は如何にして人の目に見え手に触るゝ形を取って現わるゝか、是に就て、心霊学徒は普通斯く信ずるのである³⁴。
- ・遠方に在る人の幻像が、目前に現わるゝことは是が精神感応の結果であるか、或は実際の二重身の出現であるかは未定として、とにかく古来古今に至るまで屡々伝えられ語らるゝことである。斯様な幻像が人の死か或は生命の危険に最も多く関するものであることは、英国心霊研究協会のガーネなどが精細に検査した所である³⁵。
- ・この霊体は肉体と結べる儘或は肉体と離れて、他の霊体と遠感によりて、交通し得るは勿論であるが、時としては遠感によらずして、人の五感に感受し得る物理的の形態を現わすことがある。これを物質化という³⁶。

³³ 『芥川龍之介全集』第十二巻(東京：岩波書店、1996.10), pp.299-303.

³⁴ 有馬純清著『心霊現象研究』(東京：警醒社、1924), p.316.

³⁵ 平田元吉著『近代心霊学』(京都：日本心霊学会、1925), p.221.

上記の『心霊現象研究』や『心霊学摘要』の引用からわかるように、心霊の物質化によって霊は人の目に見え、手に触れるなど、五感で感受し得る形を取って現れる。また、平田元吉氏は『近代心霊学』において、遠方にある人の幻像が、目前に立ち現れるのは、遠感現象やテレパシーの以外に、肉体を離れて浮遊する霊が物質化現象を引き起こし、複体(二重身)としても顕現する場合があると論じる。

人間の生前死後によく現れる霊魂は、「善意を以て人間に告げたき事あり、或は児孫に警めたき事あり、或は深く怨むる所あり、或は強く望む所あり、其他種々の理由ありて」³⁷、その家族や親戚など近親者の前に現れ、彼らと交遊する場合が多いと言われる。霊魂の可視化による不思議な話、いわば幽霊や生霊に関する怪談は、柳田国男の『遠野物語』(1910年)や、芥川が一高在学中に作ったとされる、怪談蒐集ノート『椒図志異』にも多数記載される。津城寛文氏³⁸によると、日本の固有信仰は、スピリチュアリズム/心霊研究と共通するという。

十九世紀末、欧米の先端学術レベルで行われていた心霊研究は、考察対象を死者と他界のリアリティを探索することに絞り、そこでトピックとして取り上げられたのが、死者の幻影＝幻姿出現である³⁹。いわば、死者が立ち現れる現象を対象の一つとする〈霊魂の物質化〉は、心霊研究において最も重要な課題だったのだ。

以上見てきたように、心霊研究は大正期に盛んに論じられていたことがわかる。その背景について、一柳廣孝氏は論考「一九二〇年代、〈心霊〉は増殖する」の中でこのように述べる。千里眼事件⁴⁰以降の大正期の日本では、「〈心霊〉系問題群が科学アカデミズムからほぼ排斥された」⁴¹が故に、むしろ様々な場と結びついていき、〈心霊〉イメージを急速に多様化、増殖させたという。例えば、日本の民間精神療法は、暗示による心霊力の活性化に伴い、千里眼事件以降も、あらゆる病を治療するという看板を掲げており、霊術はより広く民衆に浸透することになる⁴²。特に霊術運動は、一九一八年に一大ブームとなり、その後十年間にわたって隆盛を誇ったと、一柳氏は指摘する。

こうした背景の下で、〈心霊〉のイメージは、当時、文学場内部の動きとも連動し、文学場における「怪談」の復活において、超自然的な領域に「科学」的リアリティを提供し

36 山口鉦三郎著『心霊学摘要』(静岡：冲天社,1926), p.123.

37 高橋五郎著『霊怪の研究』(東京：崇山房,1911), p.131. 本書の「第七章 幽明の交感—霊魂が生前死後に於ける行動」による。

38 津城寛文「死者の幻影—民俗信仰と心霊研究の間」(『明治聖徳記念学会紀要』2007.11).

39 前掲、津城寛文「死者の幻影—民俗信仰と心霊研究の間」(『明治聖徳記念学会紀要』2007.11).

40 一柳廣孝「一九二〇年代、〈心霊〉は増殖する」(小松和彦編『日本妖怪学大全』東京：小学館,2003.4), p.596. 心霊学は一九〇七年前後からアカデミズムを媒介に、積極的に日本に移入された。しかし、唯物論的な科学のフレームを超える「心霊」の力は、本当に存在するのか。マスコミ、アカデミズムは超常能力の有無をめぐる二分し、さまざまな議論が巻き起こった。公開実験や、超能力をめぐる真偽論争等の一連の騒動が、いわゆる千里眼事件(一九〇九—一九一〇)である。

41 一柳廣孝「一九二〇年代、〈心霊〉は増殖する」(小松和彦編『日本妖怪学大全』東京：小学館,2003.4), p.583.

42 一柳廣孝「一九二〇年代、〈心霊〉は増殖する」(小松和彦編『日本妖怪学大全』東京：小学館,2003.4), p.586.

たのである⁴³。

なお、大正期の文学場における〈心霊〉を論じる際、看過できないのは、明治末から大正にかけて日本の劇壇文壇に大きな影響をもたらした、メーテルリンクの存在である。芥川の生涯と活動期の大半を占めている大正期の文芸界には、「メーテルリンクの季節」が存在したと言われる⁴⁴。大正時代には、『メーテルリンク全集』（鷲尾浩訳、全八巻、1920~1922年）のほか、〈靈魂の死後存続〉を唱えた、メーテルリンクの評論集の翻訳出版が相次ぐ。『死後は如何』（1916年）や『靈智と運命』（1919年）、『彼岸の光』（1919年）、『永遠の生命 靈魂不滅新論』（1920年）、『生と死』（1923年）等がそれに該当する。

みなもとごろう氏によると、芥川は幅広いメーテルリンクへの関心と理解を示しており、戯曲『少年と死と』（『新思潮』、1914年9月）は、メーテルリンクの影響下に創作したという⁴⁵。芥川の『侏儒の言葉』にある、「我々は我々自身さえ知らない…（略）「智慧と運命」を書いたメーテルリンクも知恵や運命を知らなかった」という一文は、芥川がメーテルリンクの戯曲だけでなく、評論集『智慧と運命』（大谷繞石訳、南北社、1913年）も実際に読んでいたことを裏付ける。

実際に、芥川は一九二〇年代に入り、西洋文学における、オカルティズムやスピリチュアルな知識を盛りこむ作品を次々と生み出した。前章でも言及したように、小説『死後』のほか、「魔術」や「妙な話」、「アグニの神」、「近頃の幽霊」、「英米の文学上に現はれた怪異」⁴⁶、「保吉の手帳から」、「河童」等がそれに該当する作品である。これらの作品の創作の背景には、大正時代における霊的潮流、いわば西洋から流入してきた心霊主義の流布や浸透が少なからずあったと想定できる。特に、「死後」において、〈僕〉自らの死後の生を前面に押し出したことや、肉眼で可視化できる霊現象を丹念に描いたことから、芥川が当時、盛んに論じられた心霊主義、その中でも物質化現象に触発された可能性は十分あるように考えられる。

4 死後の世界に通じる〈僕〉の夢について

前章では、夢世界における、死後の〈僕〉に依然として諸感情が宿ることや、そのようなく僕〉を見て何の違和感も覚えていない友人Sと妻の態度に着目し、死後の〈僕〉の

43 前掲、一柳廣孝「一九二〇年代、〈心霊〉は増殖する」（小松和彦編『日本妖怪学大全』東京：小学館、2003.4）、p.586

44 今村忠純「メーテルリンクの季節—直哉、実篤、透谷、虚子、鴎外」（鈴木貞美編『大正生命主義と現代』東京：河出書房新社、1995.3）、pp.174-181.

45 みなもとごろう「メーテルリンク」（関口安義編『芥川龍之介新辞典』東京：翰林書房、2003）、p.587

46 『芥川龍之介全集 第七巻』（東京：岩波書店、1995.6）の石割透氏による「後記」、「近頃の幽霊」の項には、「この「英米の文学上に現はれた怪異」は、「近頃の幽霊」と重複する箇所が多く、文中錯簡も見受けられる」との理由で、前回全集には「近頃の幽霊」の「後記」に「参考」として掲げられている。本全集でも、前回全集を踏襲し、次にその文章の全文をそのまま掲げた。」とある。

生を〈靈魂の物質化〉によるものと捉えた。

しかし、小説「死後」において、作者は何故〈僕〉の死後の生を、夢を介して描き出したのか、作中に夢を取り込まなければならない理由とは何だろうか、という疑問はまだ残されている。そこで、本章では〈僕〉の夢について検討したい。

「死後」の場合、現実生きる〈僕〉が、自分の死後を夢を通して見るという仕組みは、至当なことかもしれない。しかし、作者が別次元である〈夢の世界〉と〈死後の世界〉を結合したのは、単にその両世界が意識を超える領域だからとは思えない。むしろ、夢が持つある機能からではないだろうか。

僕はおのづから目を覚ました。(略)夢の中の妻は気の毒にもうまらない役まわりを勤めてゐる。Sは実際でもあかかも知れない。僕も、一僕は妻に対しては恐ろしい利己主義者になっている。殊に僕自身を夢の中の僕と同一人格と考えれば、一層恐ろしい利己主義者になつてゐる。しかも僕自身は夢の中の僕と必ずしも同じでないことはない。フロイドは一僕は一つには睡眠を得る為に、又一つには病的に良心の昂進するのを避ける為に〇・五瓦のアダリン錠を嚥み、昏昏とした眠りに沈んでしまった。……………⁴⁷

〈僕〉は自分の中に眠っている、妻に対するエゴイズムを夢認識を通じて、初めて知ることになる。いわば、〈僕〉の「恐ろしい利己主義」は、夢を介して顕在化したのである。また、この箇所注目すべきなのは、〈僕〉が「フロイド」の名を以て夢のリアリティを傍証するという点である。夢の中の友人Sが、現実の彼と余り変わらないという〈僕〉の言葉は、夢が現実味を帯びてくることを表す。更に、「良心」が「病的に」「昂進する」のも、〈僕〉の見た夢内容が否めない事実であることからであろう。

「死後」の初出稿に「フロイド」が言及されたことは、芥川が精神分析学の創始者で、無意識の概念や夢分析を提起したジークムント・フロイトの影響を受けた証拠になる。

フロイトは、「夢の解釈は無意識の知識を得るための王道」⁴⁸であると主張した。また、夢の定義や形成をめぐって、彼は『夢判断』(1900年)と『精神分析入門』(1917年)において、以下のように述べる。

- ・夢は間然するところなき一個の心的現象、しかも願望充足である。夢は、覚醒時の、われわれに充分納得の行く心的諸行為の関聯の中に組み入れられるべきものであり、極度に複雑な精神的行為の作り出したものなのである⁴⁹。
- ・とりわけ、検閲を受け、夢の中で歪んだ形で表現される願望は、放縦で粗暴な利己主義の現れであります。しかも、夢をみる人の自我はどの夢の中にも顔を

⁴⁷ 『芥川龍之介全集』第十二巻(東京：岩波書店、1996.10)、p.304。

⁴⁸ 金森誠也訳、ジークムント・フロイト著『夢と夢解釈』(東京：講談社、2001.9)、p.3。

⁴⁹ 高橋義孝訳『フロイト著作集2 夢判断』(京都：人文書院、1978)、p.105。同書には、「Ⅲ夢は願望充足である」とある。

出し、たとい頭在内容の中ではたくみに身を隠しおおせていても、すべての夢で主役を演じているのです。夢のこういう「聖なるエゴイズム」は、眠ろうという心的態勢、すなわち外界から自己の関心を引き上げることにほかならない心的態勢と無関係ではありません⁵⁰。

『夢判断』において、フロイトは、夢には夢を見る本人の意識にとって到達不能である無意識的な感情が表出するとし、夢を抑圧された「無意識の願望充足である」と捉える。たとえ夜眠っている間に夢の歪曲が行われたとしても、それは自我に容認される諸意向によって行われる検閲の結果であり、「願望充足こそいっさいの夢」⁵¹ということは変わらないと主張する。更に、夢には、日常にいるような現実的諸能力に制限されることも、道義的責任に縛られることもないので、夢を見る人の自我は、夢世界において利己的な面も表すという。

このような夢の機能や特徴に鑑みると、小説「死後」において、〈僕〉の死後の生を、夢という異空間を介在して描き出す作者の意図がわかるようになる。夢は、無意識領域に封印されている願望や不安などが現れる、非日常の〈特集な空間〉となっており、〈僕〉の〈やりきれない思い〉や〈複雑な心境〉を吐露するのに、夢は好都合な媒体である。また、「夢が願望充足である」とのことから、小説「死後」における夢も、〈僕〉が自分のいなくなった時の妻と友人のことを気につけ、窺い知りたいという〈僕〉自身の願望の現れであることがわかる。さらに、〈霊〉は妄りに現れるのではなく、ある種の理由を持ってその家族や恋人など親近者の前に現れる⁵²という霊的知識を考慮すると、「死後」において、霊体となった〈僕〉が友人や妻の前に立ち現れたのも理に適う設定であると言える。

一方、「死後」における〈僕〉の夢を論じる際に、見落とすことができないのは、夢に出てくる色合いである。そもそも、夢中の幻象は「白書の如き状態にて、光彩陸離たる夢はまず絶無であって、大抵は灰色の不鮮明な色合である」⁵³とされている。しかし、「死後」の〈僕〉が見る夢には、「カアキイ色」の日除けや「白菊」、「青竹の筒」で作られているオルガン、「黒堀」、「竹の皮の鎧」、「黒と朱との漆」に巻き立ててある鳶口、「枳殻垣」、「濡れ透つてゐた」石炭殻などが現れており、鮮明な色彩を持っていることが特徴的である。

「死後」が発表された同時代の、夢に関する学術書、『夢学』（一九一七）と『夢の心理』（一九一八）では、夢に色が現れる色彩夢について以下のように捉える。

50 懸田克躬・高橋義孝訳『フロイト著作集1 精神分析入門』（京都：人文書院、1987）、p.116。同書の「第九講 夢の検閲」による。

51 高橋義孝訳『フロイト著作集2 夢判断』（京都：人文書院、1978）、p.114。同書の「IV 夢の歪曲」による。

52 高橋五郎著『霊怪の研究』（東京：崇山房、1911）、p.130。

53 高峰博著『夢学』（東京：有文堂書店、1917.6）、pp.207-211。

- ・病的状態と色彩夢とは関係を有することあり⁵⁴。
- ・実験や実例から見ると多少病的の場合、殊に偏頭痛の際には色彩夢殊に青色夢の類がある。(後略)⁵⁵
- ・著者の友人の洋画家は画を習う前には色彩の夢を全くみたことが無かったが、洋画に専心してから、夢といえ、殆んどすべて色彩が鮮かに出てくる、それは自発的にも、又注意しても出てくると語っている。或はまた、特別の印象を残した或る色彩の記憶が、偶然現れることもあり、また熱病や、その他の病気で赤色の夢をみることもある⁵⁶。

夢をめぐる上記の学術書によると、夢に色彩が現れるのは比較的に稀なことではあるものの、決して皆無ではないという。色彩夢を見るのは、多少個人によって差異があり、また職業にもよるとされている。例えば、色そのものを扱う画家や装飾家などが経験するケースが多いと言われる。ただ、夢の中に〈青色〉や〈赤色〉が現れるのは、偏頭痛や何らかの病気と関連することがあり、不健全な兆しとして見做される。

「死後」の場合も、〈僕〉が色彩の現れる夢を通じて、自らの精神に不調をきたしたことを改めて認識するようになる。色彩夢は、晩年の芥川がよく描く夢手法の一つであり、「死後」のほか随筆「夢」(一九二六)や未定稿「夢」(一九二七)、小説「彼 第二」(一九二七)にも描かれている。随筆「夢」と未定稿「夢」の中には、「夢の中に色彩を見るのは神経の疲れている証拠である」、「色彩のある夢は不健全な証拠だ」とそれぞれ描かれている。

最晩年になって、芥川が色の夢に拘った理由の一つとして、狂気に陥ることを非常に恐れていたことが考えられる。「精神病院」に入ることは、「僕には死ぬことに変わりはなかった」(「歯車」五 赤光)というのは、狂気を極度に恐れていた芥川の真情の吐露であろう。「遺伝、境遇、偶然、一我々の運命を司るものは畢竟この三者で」(「侏儒の言葉」)、「僕の母は狂人だった」(「点鬼簿」)というような告白の言葉も、いつか自分も実母のように狂気に陥るかも知れないと絶えず不安に襲われている作者芥川の姿を彷彿とさせる。

小説「死後」の結末において、〈僕〉は「一つには睡眠を得るために」、「また一つには病的に良心の昂進するのを避けるために」○、五瓦のアダリン錠を飲んだと描かれている。しかし、大正期の医学専門誌『中外医事新報(780)』(一九一二、九)に記載されている「アダリンノ治療的効用」⁵⁷によると、催眠鎮静剤であるアダリンを○、五瓦頓服するのは、譫妄性躁病や不眠症で苦しむ患者がその対象となっている。アダリン錠を常備している「死後」の〈僕〉も、この薬が単なる催眠剤でないことは、かねてから認識していた

⁵⁴ 前掲、高峰博著『夢学』(東京：有文堂書店、1917.6)、p.211.

⁵⁵ 前掲、高峰博著『夢学』(東京：有文堂書店、1917.6)、p.207.

⁵⁶ 小熊虎之助著『夢の心理』(東京：江原書店、1918.9)、p.111

⁵⁷ 石川精一「アダリンノ治療的効用」(『中外医事新報』780、東京：日本医師学会、1912.9)、p.1284.

のだろう。「病的に良心の昂進するのを避けるために」服用するという箇所がそれをよく表す。

また、〈僕〉の言う「病的に」「昂進する」良心というのも、単に妻に対する自分の利己主義だけではないだろう。そこには、一家の戸主である〈僕〉が、〈自死〉という極端な選択をし、家族を扶養する義務や責任感の呪縛から解放されたい、という思いへの罪悪感も入り混じる。それに加えて、色彩夢で表されるような精神的な不調に対する恐怖心など、〈僕〉の言う良心には複雑な心境が錯綜したと見られる。作中において〈僕〉が、「説教因縁除睡鈔」の中の「五倫部」の話を読んでいううちに「そろそろ睡気を感じ出し」、電灯を消すと「じきに眠りに落ちてしまった」ということは、一家の戸主として家族に対する扶養義務を負う〈僕〉自身の責任感の重さを暗示させるものである。

このような〈僕〉の気持ちを仄めかすメタファーとして、作中には「青竹の筒が何本も縦に並んでゐた」「内部の見える」オルガンや、「竹の皮の鎧を拵へてゐた」妻の姿、「書斎の鴨居の上にかかつてゐた」鳶口等が描かれたと考える。オルガンは、芥川の「路上」(二十六章)と「或阿呆の一生」(二 母)にも描かれている。そこには、癲狂院の患者が面会者や周囲に惑わされず、熱心にオルガンを弾いている、ひたむきな姿が浮き彫りにされる。つまり、この両作品において、オルガンは狂人たちにとって自己アイデンティティを保つ道具として用いられる。「死後」に描かれているオルガンにも、「路上」や「或阿呆の一生」の場合と同様、自分という個のアイデンティティを失われたくない、という〈僕〉の思いが秘められていると理解できよう。

そして、〈僕〉の夢内容について看過できないのが、「竹」に関する表現である。「青竹の筒」が並んでいるオルガンや、子供の玩具を作る妻の「あまはりは」「乾反つた竹の皮だらけだった」とあるように、「竹」は死後の〈僕〉と家族との間に持つ連帯感を象徴するものである。また、敬意を持っていない人と再婚したと妻を怒鳴りつけた〈僕〉が、「書斎の鴨居の上に」「かかつてゐた」鳶口をふと発見したのは、かつて自分の書斎だった空間が近いうちに解体される、もしくは移動されるかも知れないということへの名残惜しさを仄めかす。作中において、鳶口に思いを馳せる場面のすぐ後に来る「いつか書斎でも何でもない、枳殻垣に沿つて道を歩いてゐた」という一文がそのように解釈できる根拠となる。

夢の最後には、〈僕〉が「余憤を感じたまま」「濡れ透つてゐた」「石炭殻」の道を早足に歩いて行くが、「いくら歩いて行つても、枳殻垣はやはり僕の行手に長ながとつづいてゐるばかりだった」とある。これは、夢の中の〈僕〉が人生の辛さから自死という選択肢を選び、その重圧から解放されようとしたものの、家族への思いから「死んだつて死に切れ」ないという気持ちを象徴的に示すものであろう。この箇所の「濡れ透つてゐた」「石炭殻」は、色彩の鮮明な灰色(鼠色)を表し、鼠色は芥川の「二つの手紙」や、「或阿呆の一生」、「歯車」、「たね子の憂鬱」など多くの作品に描かれている。芥川作品における鼠色は、屡々登場人物に不安や恐怖の感情を喚起し、増幅させる要因となっており、「死

後」の場合でも例外ではないと考える。

5 おわりに

本稿では、「死後」において、作者の主眼が〈夢の世界〉のみならず、〈死後の世界〉にも置いているという観点から作品を再検討し、従来の研究で十分に論じられなかった、死後の〈僕〉に光を当てた。小説「死後」において、作者が夢の中で帰らぬ人となった〈僕〉を、現実世界にいるかのように描き出した背景には、大正期に盛んに行われた心霊研究の影響、特に霊の視覚化とも言える、物質化現象に触発された可能性があることを提示した。

特に、人の霊は、それを取り巻く肉体を通してのみ、諸感覚を獲得できるというメーテルリンクの「意識の運命」に鑑み、死後の〈僕〉は実体を伴って妻や友人Sの前に現れたと推測する。夢中の友人Sや妻が、〈僕〉の死を認知しながら、何も違和感を覚えることなく〈僕〉に接してくれたのは、幽霊となった〈僕〉が生前の姿そっくりな格好に物質化、視覚化されたからだと思えられる。

霊の物質化というモチーフは、「死後」の一年後に発表した芥川の「春の夜」(一九二六)にも通じる。死の雰囲気漂浮を漂わせる「春の夜」において、後ろからNさんに抱きついた、清太郎とそっくりな不良少年は、瀕死状態にある清太郎の生霊として、霊の物質化現象によるものとして捉えられる。

従来「死後」は、フロイトの夢理論を手掛かりとして読まれてきたが、〈僕〉の夢に色が出てくることから、本作にはフロイトの精神分析に収斂してきれない側面があることを新たに検証した。色彩夢は、晩年の芥川がよく描く夢手法の一つであり、色の夢に関する知識は、芥川が同時代の夢学や夢心理学から影響を受けたと見られる。

要するに、夢は無意識領域に封印されている願望や不安などが現れる、非日常の特殊な空間であるがゆえに、作者は〈僕〉のやりきれない気持ちをその異空間を通じて存分に発散させたと結論付ける。

付記 「死後」の引用は、『芥川龍之介全集』第十二巻(岩波書店、一九九六年一〇月)に拠る。傍線、傍点は全て論者の付したもので、ルビは省略した。

参考文献(Bibliography)

- 有馬純清(1924)『心霊現象研究』.東京：警醒社. Arima, Kiyozumi(1924) *Shinreigensyo Kenkyu*. Tokyo : Keiseisya.
- 一柳廣孝(2014)『無意識という物語』.名古屋：名古屋大学出版. Yichiyanagi, Hirotaka(2014) *Muishiki to iu monogatari*. Ngoya : Nagoya daigaku syuttupan.
- 小熊虎之助(1918)『夢の心理』.東京：江原書店. Oguma, Toranosuke(1918) *Yumeno Shinni*. Tokyo : Ehara Shoten.
- 懸田克躬、高橋義孝(1987)『フロイト著作集1 精神分析入門』.京都：人文書院. Kaketa, Katsumi; Takahashi, Yoshitaka(1987) *Furoito Tyosakusyu1 Seshibunsekinyumon*. Kyoto : Jinbunsyoin.
- 栗原古城(1916)『死後は如何』.東京：玄黄社. Kuribara,Kojyo(1916) *Sigoha Ikan*. Tokyo : Genkosya.
- 高峰博(1917)『夢学』.東京：有文堂書店. Takamine, Hiroshi(1917) *Yumegaku*. Tokyo : Yubundo Syoten.
- 高橋五郎(1911)『霊怪の研究』.東京：嵩山房. Takahashi, Goro(1911) *Reikaino Kenkyu*. Tokyo : Suzanbo.
- 高橋義孝(1978)『フロイト著作集2 夢判断』.京都：人文書院. Takahashi, Yoshitaka(1978) *Furoito Tyosakusyu2 Yumehandan*. Kyoto : Jinbunsyoin.
- 羽仁礼(2001)『超常現象大事典』.東京：成甲書房. Hani, Rei(2001) *Chyojyogensyo Daijiten*. Tokyo : Seiko Syobo.
- 平田元吉(1925)『近代心霊学』.京都：日本心霊学会. Hirata, Motokichi(1925) *Kindaishinreigaku*. Kyoto : Nihonshinreigattkai.
- 水野葉舟(1923)『生と死』(心霊問題叢書第2巻).東京：新光社. Mizuno, Yosyu(1923) *Sei to Shi*.Tokyo : Shinkosya.
- 山口鉞三郎(1926)『心霊学摘要』.静岡：冲天社. Yamaguchi, Etsusaburo(1926) *Shinreigaku Tekiyo*. Shizuoka : Tyutensya.
- 柳宗悦(1911)『科学と人生』.東京：初山書店. Yanagi, Muneyoshi(1911) *Kagaku to Jinsei*. Tokyo : Momiyama Shoten.
- 鷺尾浩訳(1920)『マーテルリンク全集 第2巻』.東京：冬夏社. Washio, Hiroshi(1920) *Materurinku Zensyu Dai2kan*. Tokyo : Toukasya.